



ろう者への日本語支援を通して見えてきたこと

認定 NPO 法人名古屋ろう国際センター 理事長 キム ナムユン

設立経緯

認定 NPO 法人 名古屋ろう国際センターでは、外国人・日本人ろう者・ろう児の支援を行っています。

私は 20 年ほど前、結婚を機に韓国から来日しました。韓国での手話通訳経験を生かし日本でも手話通訳者として活動する中で、日本人ろう者も日本語が苦手なことがわかってきました。

ろう者は、耳が聞こえないため日本語の自然習得が難しく、昔は口話教育が中心だったことが、日本語が苦手な原因だと考えられます。外国人の私も、日本語の習得で苦労した経験があったため、日本語で悔しい思いをしているろう者の気持ちが痛いくらいわかりました。そして、生活していく中で、日本の社会で生きていくには日本語の読み書きが必要不可欠だということもわかってきました。

しかし、耳が聞こえる外国人のための日本語教室はたくさんありますが、ろう者のための日本語教室は全国を探してもごくわずかです。名古屋にはありませんでした。日本人ろう者の場合は特に、日本生まれ日本育ちなのだから、書けばわかるだろうという考えが先行し、問題として捉えられることもなかったのだと思います。

そこで、ろう者が学べる場所がないのであれば、私が日本語の教え方を学び、それをろう者に教えながら、ともに成長していこうと決意し、活動を始めました。

活動内容

外国人・日本人ろう者を対象にした日本語教室では、現在 7 人の日本人ろう者が勉強しています。今までに、韓国、フィリピン、トルコ、中国出身のろう者が勉強してきました。ろう者は日本語の筆談で勉強するよりも、媒介語として第 1 言語の手話で勉強することで言葉の意味の理解が進むといわれています。テキストに「みんなの日本語」を使用し、手話で勉強をしています。「み

んなの日本語」は本来は外国人向けに作られた教材ですが、物語があり、実生活に近い感覚で学ぶことができるため、ろう者に好評です。教室は週 1 回ですが、家に帰ってからも習った文章を 20 回ずつ書くように宿題を出したり、受講生同士で教えあう自主学習の場を設けたりしています。普段の会話の中でも、習った文型を指文字や手話で表すなど、日常生活の中でも使いこなせるようにしています。



日本語教室、九の読み方

年 2 回行われる「日本語能力試験」にも挑戦しています。試験を受けることでろう者の目標ができ、やる気の継続につながります。また、受講生自身が現在のレベルを知るいい機会となります。2017 年 7 月に行われた日本語能力試験では N5 に 3 人、N3 に 1 人合格しました。合格した 70 代のろう者は「今まで試験を受けたことがないので、初めて合格できてうれしい」と涙を流して喜んでいました。



合格通知



目標を達成することで日本語を学ぶ喜びを知り、一度学ぶ喜びを覚えたろう者はすすんで勉強に取り組むようになります。

このような、ろう者の日本語教室を通し、言語面の支援は早くから行うことが必要だと考えるようになりました。社会では大多数の人は耳が聞こえ、ろう者は第1言語が違う人たちの中で生活をしなくてはなりません。その時、壁になるのは、言語と文化の違いです。

日本語は察する文化で、言わなくても伝わるように言葉の中に多くの意味を含んでいます。しかし手話は、はっきりと伝える文化であるため、手話で伝えたいことをはっきりと言います。察する文化とはっきり伝える文化とでは、誤解があっても仕方のないことです。

ろう者が子どもの頃から第1言語である手話の力を伸ばし、第2言語である日本語の勉強を始め、日本語に慣れていければ、言語の壁は低くなり、日本語の文化と手話の文化の違いもわかるようになってきます。

耳の聞こえない子どもが小さい時から手話の力を伸ばすためには家族の協力が必要不可欠です。一緒に生活をする家族が手話を覚え、家庭でも手話ができることが望ましいのですが、子どもと一番長い時間を過ごす母親は手話が必要だと感じていながら、手話を学ぶ機会や場所がないことがわかってきました。

そこで、耳の聞こえない子どもとその家族の支援をできる方法がないかと考え、2017年8月にろう児を対象にした児童発達支援・放課後等デイサービス パレットを開所しました。パレットでは、ろう児に日本語の勉強・手話で絵本の読み聞かせ、保護者には手話教室を行い、親子の支援にも力を入れています。



ろう児の母親を対象とした、手話での絵本読み聞かせ

自治体との協働について

2015年、2016年は（公財）あいちコミュニティ財団のあいちの課題深掘りファンド「愛知県内の外国人聴覚障害者調査」、事業指定プログラムミエルカ「手話で絵本を読み聞かせ！ろう児家庭に笑顔を届けるプロジェ

クト！」の寄付募集を行いました。あいちコミュニティ財団に集まったさまざまな業種のボランティアと財団職員が各団体に派遣され伴走支援をしながら各団体が考える課題の調査や寄付募集を行いました。派遣されたボランティアと財団職員の中には、ろう者に会ったこともなく、手話をするのも初めての方が多くいました。はじめは私たちの活動の意味をなかなか理解してもらえませんが、実際にろう者と接する機会を設け、何度も話をする中で徐々に理解を得ることができました。理解を得ることはこんなに難しいのだと痛感したと同時に、このように理解してくれる人を増やしていくことが大事だと実感しました。今後は企業、大学、病院などと協力して手話の研修会を開き、直接ろう者と話をする機会を多く設けたいと思っています。

また、名古屋国際センターとは、外国人ろう者の日本語支援の連携をしたいと考えています。名古屋国際センターでは、外国人の日本語教室を行っているため、手話が必要な外国人ろう者も日本語を学ぶために訪れる機会があると思います。外国人ろう者が訪れた場合は私たちの団体も一緒に手話と日本語の双方から支援したいと考えています。

今後の抱負

ろう者の日本語教室を一つの事業として確立できたらと考えています。行政の事業として外国人のための日本語教室はありますが、ろう者の日本語教室はありません。

ろう者の中には、日本語が苦手なだけでさまざまな問題に直面している人、情報がうまく入らず学べるところがないとあきらめてしまっている人がいると思います。

一人でも多くの学びたいろう者が学ぶことができるようにこの活動を継続していきます。今後は親子支援にも、もっと力を入れていきたいと思っています。ろう児は言葉が通じず、苦労しているのですが、母親や父親も子どもと話したい、通じ合いたい、わかりたいと強く思い、同じように苦しんでいます。私たちが、ろう児と母親、父親の両方を支えていける存在でありたいと思います。

最後に、ろう者が誰とでも自由に意思疎通ができる社会になることを願っています。